

スモーキン・エース／暗殺者がいっぱい

2007(平成19)年5月13日鑑賞<三番街シネマ>

★★★★



監督・脚本＝ジョー・カーナハン／出演＝ジェイミー・ピヴェン／ジョセフ・ラスキン／アンディ・ガルシア／レイ・リオッタ／ライアン・レイノルズ／ジェイソン・ベイトマン／ベン・アフレック／マーティン・ヘンダーソン／ピーター・バーグ／コモン／ジョエル・エドガートン／アリシア・キーズ／タラジ・ヘンソン／ケヴィン・デュランド／クリス・パイン／モーリー・スターリング／ネスター・カーボネル／トミー・フラナガン (UIP 配給／2007年アメリカ映画／108分)

……『オーシャンズ11』(01年)や『オーシャンズ12』(04年)のようなオールスター映画は、野球のオールスターゲームと同じく、雑パクで大味。そう思っていた私の概念は、この映画で一挙に大転換！ マフィアのボスと、問題児となったマジシャンのエースを中心として、キャラの濃いっぱいの暗殺者、保釈保証人、FBI 捜査官たちが登場するが、スピーディーでスリリングな大活劇の展開は、実に面白い！ そのうえ、実は深い知能戦もあるうえ、アツと驚く大ドンデン返しも……。108分という時間がアツという間に過ぎていくこと請け合いの、お薦め映画……。

暗殺者がいっぱい……

この映画はそのサブタイトルどおり、暗殺者がいっぱい……。観客席からこの映画を観るだけなら、気楽にそう言っておけばいいのだが、評論を書くとなるとそうはいかない。それはなぜなら、いっぱいいる暗殺者のグループ分け、そのキャラクターの分析、各暗殺者の狙いや行動手順そしてその帰趨等をきちんと分析したうえ、どこをどう書くかを考えなければならないため……？

はっきり言って、日本人がこの映画を観るについては、パンフレットに「CHARACTERS」としてまとめられている、バディ・イズラエル、通称エース(ジェイミー・ピヴェン)を中心とし、彼をめぐるたくさんのキャラクターとそ

の人間関係一覧表を読みながら、整理することが不可欠。山田さんや佐藤さんそして太郎さんや花子さんなら、名前とキャラがすぐに一致するが、キャラクター豊かな暗殺者がいっぱい登場してくると、その名前と顔が一致しないうえ、特殊メイクで顔や姿を変える名人ラズロ・スート（トミー・フラナガン）まで登場するこの映画では、まずは人物の識別が大変。

暗殺者のキャラ分けは……？

そこでまずは暗殺者のグループ分けとそのキャラを紹介しよう。ジョー・カーナハン監督は、ストーリーの複雑なこのバイオレンス映画をわかりやすくするため、暗殺者たちのキャラをきわめて濃く目立つものになっているので、その理解は簡単……。

まずわかりやすいのは、ジョージア・サイクス（アリシア・キーズ）とシャリス・ワッターズ（タラジ・ヘンソン）という女2人組。とりわけ注目は、中国マフィアを一瞬にしてつぶしたと噂される美貌の殺し屋サイクス。「女の武器」をふんだんに活用すべく、娼婦姿で「闘いの場所」に赴いたが……。映画初出演となった、R&Bシンガーとして有名なアリシア・キーズがこのサイクスを演じたが、派手な化粧と長い髪そして惜しげもなく露出した太もも姿は、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（03年）の栗山千明と同様のインパクトが……。

またこのサイクスに相棒以上の妖しげな感情を抱いているスナイパーのシャリスは、絶好の位置に50口径の狙撃ライフルを備えてサイクスを援護したが……。

次は、誰かれかまわず容赦なく殺しまくると評判の凶暴なトレマー3兄弟。その構成は、①後先考えずに破壊行動をくり返すジープス（ケヴィン・デュランド）、②トレマー兄弟の中では1番冷静な男ダーウィン（クリス・パイン）、③向こう見ずにかけてはトレマー兄弟の中でも1番のレスター（モーリー・スターリング）の3人。しかし、残念ながら日本人の私たちにはその区別はちょっと難しいから、3人で1人前という扱いでオーケー……？

最後は、^{エストラゴ}破壊屋と呼ばれ、殺し屋仲間からも恐れられるパスクアール・アコスタ（ネスター・カーボネル）。前述のスートを含めたこんな7人の暗殺者たちが、個性豊かに殺しの競演を……。

エースの仲間もいっぱい……その1

スモーキン・エースの紹介は後に回し、エースことパディ・イズラエルを狙う暗殺者がいっぱいいるのと同様、エースの仲間もいっぱい……。その第1は、エースからも一目置かれている寡黙な黒人ボディガードのサー・アイビー（コモン）。敏腕で忠誠心も人一倍厚く頼りになる男だが、エースが次第に追い詰められていく中、遂に仲違いが……。第2は、エースが抱えるボディガードの1人ヒューゴ・クループ（ジョエル・エドガートン）、そして第3は、とにかく女好きの巨漢のボディガード、ベルナルド・“ビーニー”・アルフォンソ。

エースの仲間もいっぱい……その2

他方、ヘマをやらかして逮捕されたエースには弁護士がついているのは当然。そして、正義の味方が悪徳かよくわからないエースの弁護士がルパート・“リップ”・リード（ジェイソン・ベイトマン）。逮捕され、起訴された被告人の弁護人が最初にやる仕事は保釈申請だが、アメリカには保釈保証人という制度がある。その詳しい説明をここでやっているとは長くなるので省略するが、リード弁護士に雇われて、保釈保証人になっているのがジャック・デュブリー（ベン・アフレック）。弁護士にとって裁判所から保釈の許可をもらい、保釈保証金を納めた後、被告人に逃走されるほど不名誉なことはないが、被告人エースと弁護人リードの関係がまさにそれ。保釈後、行方不明となったうえ、そのエースの心臓に100万ドルの懸賞金が賭けられていることを知ったリード弁護士は、ジャックの他に新たにホリス・エルモア（マーティン・ヘンダーソン）と“ピストル”・ピート・ディークス（ピーター・バーグ）という元刑事を雇い、エースの身柄を確保しようとしたから、この弁護士とその配下の3人の男たちは、どちらかというとならぬエースの仲間……？

なぜ一流の暗殺者たちが名乗りを……？

この映画の舞台はラスベガス。ラスベガスといえば、ギャンブルとエンタテインメントのまち。そんなまちには、闇社会を牛耳るマフィアの組織があるのがごく自然……。そのマフィアのボスが、100件以上の殺人を請け負ったと噂され

るプリモ・スバラツザ（ジョセフ・ラスキン）。そして、そんなラスベガスのまちで、No.1 マジシャンの地位をキープし続けているのがエースと呼ばれるバディ・イズラエルだったが、彼がそこまで成功できたのはこのマフィアのボス、スバラツザのおかげ。まあ日本で言えば、美空ひばりが山口組3代目組長田岡一雄からかわいがられたようなもの……？

美空ひばりはあくまで芸人・歌手に徹し、惜しまれながら「昭和の歌姫」としてこの世を去ったが、No.1 マジシャンのイズラエルはかなりクセが悪かったよう……？ それは、裏社会でチャホヤされているうちに、自分もその社会での上げられると勘違いしたこと。そのためイズラエルはクスリ、窃盗、挙げ句の果ては銀行強盗までやらかしたが、それは警察や FBI を刺激することになり、マフィアの組織全体への追及が強まるというヤバイ結果を招くことに……。イズラエル自身の逮捕はまだしも、組織全体に大混乱をもたらしたイズラエルに対するスバラツザの怒りはすさまじかった。そこでスバラツザは、謎のスウェーデン人に依頼して、イズラエルの心臓に100万ドルという懸賞金を賭けることに。その結果、その懸賞金目当てに暗殺者がいっぱい登場することになったのだが……？

FBI の3人は……？

冒頭、最新の情報システムを駆使してスバラツザの邸宅の張込み調査を続けている FBI のベテラン捜査官ドナルド・カラザーズ（レイ・リオッタ）と、その相棒である若き捜査官リチャード・メスナー（ライアン・レイノルズ）の姿が映し出される。FBI 副長官のスタンリー・ロック（アンディ・ガルシア）はデスクで指示するだけだが、カラザーズくらいのベテラン捜査官になっても何十時間にも及ぶ張り込み現場に行かなければならない姿を見ると、その大変さがひしひしと……。

それはともかく、張込みの甲斐あって盗聴に成功したのが、スバラツザの部下が何者かにかけた電話での会話。その会話内容は、「じいさんはイズラエルを殺すためにスウェーデン人の暗殺者を雇った。『イズラエルの心臓がほしい』と言ってる。おれたちが先に誘拐して、身代金をせしめよう」というもの。しかも、スバラツザがイズラエルの心臓に賭けた報奨金は100万ドルという大金。現場の2人は、松坂大輔のレッドソックスへの移籍金とほぼ同額の100万ドルという金

顔に見合せるだけだったが、その報告を受けたロックは、直ちにイズラエルを保護せよという命令を下したのは当然。さて、保釈の身でありながら姿をくらました肝心のイズラエルは、今一体どこに……？

アメリカでは「司法取引」は常識

今、イズラエルはタホ湖のほとりにある超高級カジノ・ホテル最上階のペントハウスを借り切って、仲間のアイビーたちと共に身を隠していた。そんなイズラエルがどうしようかと悩んでいるのが、ロックから持ちかけられた司法取引に応じるべきか否かということ。強盗事件などで逮捕されたイズラエルに対しては、終身刑は確実。それを軽減してやる代わりにロックが持ちかけた司法取引は、かつてマフィアの組織に入り込んでいたFBIの潜入捜査官ヘラーの殺害にスパラッツが関与していたことをイズラエルに供述させること。きっとイズラエルはスパラッツによるヘラー殺しの実態を知っているはずだというロックのこの提案を受けて、イズラエルが真剣に悩んだのは当然……。

もっとも、ボディガードである巨漢のアルフォンソは、招き入れていた何人かの娼婦たちと一緒に大の字になって眠りこけていたから、ホントにイズラエルの警備は大丈夫……？ イズラエルたちはホテル警備室の警備主任を買収し、「当ホテルの最上階は目下全面改装中で、ご利用になれません」と説明させていたが、果たしてそれだけでホントに大丈夫……？

目指すはホテルの最上階……

暗殺か保護かそれとも逮捕か、その目指すものは暗殺団、保釈保証人、FBIという立場によってバラバラ。またその目的も、金のためか、正義のためかそれとも〇〇のため、△△のためかバラバラだが、暗殺団、保釈保証人、FBIという3つのグループが目指すのは、イズラエルが隠れ住んでいるカジノ・ホテルの最上階。

これだけいっぱい暗殺者たち、保釈保証人そしてFBI捜査官たちのキャラを明確に示しながら、ホテルのエントランス、ロビー、警備室さらにはエレベーター、廊下、階段等を舞台とした攻防戦・銃撃戦を面白く展開させていくジョー・カーナハン監督の手腕は大したもの……。

その第1ラウンドは、トレマー3兄弟による保釈保証人グループ3人への襲撃だが、端正な顔立ちをしているのはベン・アフレック扮するデュプリーだけで、その他はみんな悪そうな顔をしている(?)から、誰が殺されて、誰が生き残っているのかは少しわかりづらいかも……? また、サイクスとシャリスという女2人の活躍ぶりがわかりやすいのは当然だが、拷問を得意とするアコスタや変装のプロであるスーツの動きもわかりにくいので、よく注意を……。

しかして、ターゲットとなっている肝心のイスラエルはというと、打ち寄せてくるプレッシャーの中、ドラッグを吸引しているだけ……? そして、司法取引に応じ仲間を見捨てる決心をしたイスラエルと、アイビーは遂に仲違いすることに……。

その他、超高級ホテルを舞台として展開される劇画さながらの善悪入り乱れた銃撃戦は、映画ならではの楽しみをタップリと提供してくれることまちがいなし……。

なぜ重大な方針転換が……?

この映画はタイトルに騙されてはダメで、FBIのロック副長官をメインとする知能戦の部分にも注目する必要がある。その第1が司法取引だが、当初FBI捜査官のカラザーズとメスナーをカジノ・ホテルに向かわせた目的は、イスラエルの保護(逮捕)。しかし、FBIのデスクには時々刻々リアルタイムでさまざまな情報が集まっていた。既にホテル内でさまざまな攻防戦が展開されている中、ロックの手元に1つの機密文書が届いたが、それを読んだロックは、直ちに「状況は変わった。スパラッツァに接触しろ」と従来の命令の変更を……。

他方、メスナーは、エレベーター内でカラザーズが銃弾を受けて倒れているのを発見していた。また、売春婦としてホテル内にもぐり込んだサイクスの指示により、シャリスは「ビッグ・ママ」と呼ばれる50口径のライフルによる銃弾をホテル内に次々と撃ち込んだため、ホテル内はメチャクチャに混乱。そんな中、自らも負傷したサイクスの応援要請により、FBIの武装部隊が鎮圧のためホテルに向かうことに。

しかし、FBIがこんなずさんな、その場しのぎの指揮命令では、一体どうなるの……? ようやく大騒動が一段落したホテルのロビーに、デスクで指揮をとっているはずのロックの姿を発見したメスナーは、カラザーズ死亡の怒りと、状況が変わったことの報告を受けなかったことへの怒りをロックにぶつけたが……?

ドンデン返しの妙を満喫しよう……？

たくさんの登場人物たちがくり広げるドタバタ劇(?)だけでも、ゲーム感覚的に観ていて十分面白いもの。そんな中で誰が死に、誰が生き残ることになるのかは、あなたの目で確認してもらいたい。1つ注目してもらいたいのは、100万ドルの懸賞金をめぐるこんな血で血を洗う抗争劇の中にも、一筋のラブロマンス(?)が生まれること。さて、それは誰と誰の間で、またどんな状況下で……？

ホテルを舞台とした大活劇は遂に終わりを迎えた後に展開されるのが、メスナーとロックの大論争。「なぜ状況が変わったと報告しなかったんだ？ そうすればカラザーズは死ななくてすんだはずだ」と執拗に食い下がるメスナーに対して、ロックは「説明はワシントンです。その銃を下げないとクビにするぞ」と答えたが、それでもメスナーは引き下がらない。そこでやむなくロックの口からは、あの機密文書に書かれてあったらしい、ある重大なヒミツが……？

それをこの評論に書くことは、もちろん厳禁！ しかし、この後に待っている大ドンデン返しの展開に、きっとあなたは驚くはず。そして、そこであらためてこの映画のエンタテインメント性に感嘆するとともに、ジョー・カーナハン監督に対して、思わず「ブラボー！」と叫びたくなるはず……。

クエンティン・タランティーノ監督 vs. ジョー・カーナハン監督

この映画のパンフレットにはジョー・カーナハン監督のインタビューが載せられている。ジョー・カーナハン監督は、トム・クルーズの『Mi: III』(06年)で一度監督に起用されかけながら途中降板のやむなきに至ったことで有名……？ したがって、「本当のことを言うと、あの時、僕の監督としてのキャリアもこれで終わりだと思ったよ」とインタビューの中で語っているのは、実は本音……？

その中で彼は、この本音とは別に、タランティーノ監督と対比されることについて、明確に「作った僕が断言するけれど、この映画にはタランティーノの要素なんて、1ミリもない。無理矢理、何か似た雰囲気があるものを探して挙げるとすれば、せいぜい『ジャッキー・ブラウン』(97年)、つまり、タランティーノ作品の中でもっとも成功していない映画だ」と断言しているところが面白い。

ちなみに、この映画についてのジョー・カーナハン監督自身の宣伝文句は「これは、私が全力を注いだ、イカれた、ド派手なアメリカ映画だ!」というもの。しかし、例えばロサンゼルスタイムズのそれは「『オーシャンズ11』と『オーシャンズ12』を注いで、そこに『キル・ビル』シリーズをブレンドして、トマトジュースとタバスコを入れ、壁にブチまけた作品だ!」というもの。このように、この映画は当然のようにタランティーノ監督作品と比較・対照されている。ところが、それに対するジョー・カーナハン監督の反発はかなり強いもの。そのことは、「『キル・ビル』はビジュアル的には興味深いけれど、好きじゃない。僕らはまったく違うタイプのフィルムメーカーなんだよ。なのに、僕の映画を見て『タランティーノみたいだ』なんて言う人がいたら、『ちゃんと見ろよ』と言いたいね」との発言を見れば明らか。

さて、あなたはこの映画にタランティーノ色を見る? それとも、タランティーノ色とは全然違うと見る……?

よく108分に収めたもの……

プロ野球でも、オールスター戦になるとお祭り色が強くなり、真剣勝負の醍醐味が弱くなるもの……? それと同じように、オールスターキャストによる映画がややもすれば大味になるのは、『オーシャンズ11』(01年)、『シネマルーム1』32頁参照)や『オーシャンズ12』(04年)、『シネマルーム7』140頁参照)を見れば明らか……?

オールスターキャストになると各人の登場場面のつくり方が難しくなるのは当然だが、その整理をこの映画は冒頭から実にうまくやっている。ちなみに、『オーシャンズ12』は125分だが、この映画は108分。最後のドンデン返しのための「持ち時間」を〇〇分とすれば、約90分で『オーシャンズ12』以上のややこしい登場人物たちの活劇を整理しながら、観客を十分楽しませたことになるから、立派なもの。何ゴトも長ければいいというものではないということは、ともすれば長くなりがちな私の映画評論においても、注意しなければ……。

2007(平成19)年5月14日記